

核兵器廃絶の論理

森 一久

(1) 核兵器初使用当時の背景

第二次大戦とくにその後半の時期において、日本・ドイツの軍部が、それまでの戦争道徳を甚だしく無視する戦闘行為（毒ガス等の使用、非戦闘員の殺戮、特定の人種・宗教に属する集団の殺戮など）を繰り返すようになった。連合国側もこれに対抗するため（やむを得ず？）、同様な手段、とくに非戦闘員への無差別攻撃、を積極的に行うようになった。ドレスデン、東京、神戸等々であり、そのあげくが同様な発想による原爆の投下であった。（スタンフォード大学B. F. BernsteinのForeign Affairs Vol. 74, No. 1, p. 135-にもあるように、原爆投下地点の選定には、半径3マイル以内に人口密集地があること、が第一基準とされた。）そういった連合国側の行為の根拠は、「これらの国では一般大衆もすべて潜在的兵士であるから攻撃対象としてかまわない」ということであったのであろう。

戦後、連合国による戦争裁判はこの戦争道徳違反を最大の根拠として断罪した。にもかかわらず、この戦争道徳（この言葉自体矛盾にみちた概念ではあるが、人類がこれすら放擲して恥じないのであれば、動物以下の存在と自認することになる）の類廃或いは放擲について、特に戦勝国側では、その正当性について何の分析や検討もなされていないし、道徳の回復を訴える声もあまり聞かれないできた。それどころか、この無道徳の状況の継続を望んできたようにみえる。これは、核兵器が五つの大国で独占的に保有されている事と密接に関連がある。そして、このような状況がこの50年間にどんなに多くの悲劇を生んだことか、朝鮮戦争のときも、ベトナム戦争のときも、凄絶な道徳違反が繰り返されてもこの点に対して、大国から非難の声はそれほどでなかったし、最近の旧東欧ルールなき戦闘も、こんなような戦争道徳に対する世界の不感症が根底にあると思う。国際紛争手段としての戦争の放棄が無論理想であるが、依然として武器貿易が横行する世界の現実のなかで、「戦争道徳の回復」問題は、重大問題ではないのか。

）核兵器の悪

放射線による特殊な傷害と、無差別な大量破壊ない殺戮が、核兵器の残忍性の象徴といえる。今日まで廃絶の理由として、前者（放射線障害）が強調されてきたのは、既に禁止が国際的に合意されている化学兵器と生物兵器との相違を強調したい等の、種々雑多のグ

ループにとって都合がよかったからのように思える。その結果、ヒロシマ・ナガサキの放射線障害の説明は、その根拠が疫学という特殊な学問に依存していることと相まって、きわめて情緒的であり続けてきた。たとえば、”両市の場合、遺伝的影響は無かった”という事実を今日でも新聞は明記できないなどというのは、全く異常としか言いようがないし、その結果、被爆者に対する差別感もまたストレスも不当に増幅されてきたと思う

核兵器は、一般大衆や病院等の人道施設と一緒に大量破壊ないし殺戮する兵器なのである。(1)の例に見るように、どんな兵器も、意図的に非戦闘員を巻き添えにすることはできる。しかし、核兵器は不可避的に巻き添えにするものであり、前述の破壊された戦争道徳のもとでのみ存在できるものなのである。核兵器否定の根拠として、このことをいくら強調してもよいし、そうすることによって始めて、核兵器廃絶の訴えは孤立を脱することができると思う。

(付記) 残念ながら戦争手段の放棄は、今後永い間国際合意の対象となりそうもない。従って、戦争道徳の問題は、兵器管理のことを離れても、人類の将来にとって重大な緊急課題である。世界の秩序に責任を持っているつもりの方(国)の真剣な取り組みを切望する。

核兵器は戦争道徳(平和)を引用、戦争廃絶への第一歩
具に2つ別子も9つある
同様に別子も9つはない。